

の發芽前に施すのは勿論のこと夏季など時々施す水に極めて稀薄なる肥料を混じて施すのがよい、すべて肥料は一時に濃厚なるものを施すのは、有害であるが稀薄な肥料を少量つゝ絶えず施すやうにしさへすれば少しも害なく大に益があるのである、況んや薔薇の四季咲種のやうに四季絶えず開花するものにあつては肥料は度々に施さねばならぬ。

また珍奇な變咲をしますゝその美を發揮させて優等種に仕立上げるには主として肥料の力に待たなければならぬ、而してその肥料は前に述べたやうに必らず配合した肥料を用ひてそして燐炭に混合したり或は吸収したりして所謂燐炭肥料として用ひなければならぬ、さうすると只に肥料の經濟となるばかりでなく植物の生育上大効のあることは前すでに述べた通りである。

元來植物には肥料を與えると同時にその肥料をして根に能く吸収せしむる

やうな方法を取らなければならぬ、植物の根とても生活力を有する以上は單に器械的に肥料分を吸収させんとしたとて吸収するものではない、頂度吾々人間が難ら滋養分を與えてもらつたところで胃が健全でないとそれを食して消化して身体の養ひにすることが出来ないと同じことで植物にも、只肥料分を多く與えたとしてそれでよいと云ふものではない、之れを吸収して同化さすやうな方法をも取らなければならぬ、乃ち根の健全言ひ替れば根の衛生と云ふことにも注意をしなければならぬ、而して根の健全を計るに最も良き方法は燐炭を施すことである、燐炭肥料を施すことである、此故にすでに前に述べた話の内には所々に燐炭を用ゆることを述べて置いたが此ことは堅く守らねばならぬ。

變咲を培養して益々優等の種類を得やうと云ふには必ず燐炭を用ひねばなら

ぬ、燻炭は實は從來曾て蓄薇に應用したことはないのである、漸く余が數年前から實驗し始めたので蓄薇に應用することなどを述べるのは今回が始めてである、然かし他の植物に對する經驗と且つは理論上からも實際上からもその蓄薇に對して偉大の効があると云ふことを認めたら茲に之れを大に吹聴する次第である、讀者諸君が幸ひにして試みられて各自で經驗せられれば必ず大に得るところがあつて従つて蓄薇栽培上に數段の進歩を來たすと云ふことは余の斷言して憚らぬところである。

要するに變咲を培養することの秘訣は燻炭を用ゆるにありと云ふてもよい、從來變咲を養成するについての第一の困難は變咲を造り出すことではなく、變咲は人工媒助法や實生法に依れば容易に造り出すことが出来る、然かしその折角見出した變咲の性を發揮さして益々優等種に仕立てんことが困難であつたの

だ、變咲は往々にして惡變し易ひ、その惡變し易ひ變咲を惡變せしめないばかりでなく、一步進んで改良進歩さして行くには燻炭を用ゆるにこした方法は現今ないのである、燻炭を用ひさへすれば施した肥料の分量が過ぎたとて一向に害がないと云ふのだから面白い。

元來何れの場合でも草花の優等種を養成するには肥料を多量に用ゆることが肝要であるが肥料は其分量が過ぎると却つて害があつて植物の萎縮を來たす場合が多い、而してその適當の分量を定めると云ふことが極めて困難なのであつた、乃ち肥料の分量を過不及のないやうに適當にすると云ふことが最も六ヶ敷い點であつて之れは多年の經驗を積まなければその當を得ることが出来なかつた、乃ち此點は所謂草花栽培家の秘訣とも稱す可き點であつて余とても今一々茲にその分量を示すわけに行かぬ、況んや性状の異なつた變咲を養成する

場合などには、到底その局に當るものでなければ知ることの出来ない點があるのだ。

然し燻炭を用いた場合には肥料の分量が過ぎたとして一向植物に害を興えることがないといふのだから妙ではないか、誠に面白くないか、いやこんな有益な発見はないではないか、乃ち特に肥料の分量を過分に施す必要はないが、誤つて少し位多く施したとして或は甚だ過分に施したとして一向に害がないのである、これ主として燻炭の吸收作用に依るものではあるが、その他種々なる理由があるのである、いまその理を茲で述べる必要もなし且つ紙面もないからその理屈は除くことにして兎に角燻炭を用ゆると云ふことは肥料分を適宜調節して植物に過不及なく興えると云ふことになるのである、之れ蓄炭培養上大なる進歩ではあるまいか。

なほ茲に述べ置く可きは土質との關係であるすべて植物には各々その撰ぶ土質があつて蓄炭にもその適する土質が元よりあるのであるが、燻炭を用ひさへすれば大概の土質ならば一向別に撰ぶ必要がないのである、乃ち燻炭を用ゆる場合には普通の畑土を用ゆれば充分である、燻炭の効能もまた大と云はねばならぬではないか。

(三) 水分の施し方

花壇に植えたるものは盛夏の候を除くの外は時々稀薄なる液肥を施して水分を興ふればそれでよいのであるが、鉢植物に至つては大に注意を要するのである、言ふまでもなくすべての植物特に草花類はその枝葉から水分を蒸發する分量が中々多く特に春季生育の旺盛な時に於ては水分を吸收する分量が多いものである、蓄炭などは他の草花に比してその生育力が旺盛であるから従つて他の

草花に於けるよりも多くの水分を施さねばならない、また同じ薔薇の内でもその枝葉が繁茂して花の美大なるものほど肥料分を多く要すると同時に水分をも施さねばならぬから大に此點に重きを置かねばならぬ。

さりとて水分の多きに過ぎるのは、やはり肥料の多きに過ぎるのと同じやうな悪結果を來たすから能くその種類と氣候と天候の關係に由つて斟酌するのは云ふまでもないことであつて、その斟酌の仕様に由つて薔薇の生育がよくもなり悪しくもなるのである、之れも尙ほ肥料の關係と同じやうに水分と云ふことに重きを置いて各種類について各自が經驗を積むより外に仕方がない。

兎に角薔薇は何の草花とは違ひ四季を通じて開花するものであるから、従つて水分の關係にも四季を通じて注意しなければならぬ、乃はち春と夏と秋と冬と水分の施し方が異なるのは勿論その年の氣候とかその時の天候の工合を見計

らつて絶えず斟酌しなければならぬのである、諸君よ此水分の關係を軽く見てはならぬ、此水分の工合に由つて變咲などは優等にも劣等にもなるので彼の歐米諸國の原産たる西洋草花などの時として我邦にて生育の悪しきのは他に原因もあるが主として水分の關係を等閑に附すからである、此故に薔薇を栽培するにしても特に鉢植にしたものとか變咲のものは能く水分の關係に注意して過不及のないやうに心掛けねばならぬ。

(四) 剪 枝 方 法

薔薇はその性として一般に枝葉の繁茂することが多いものであるから時々舊枝を去つて肥大なる新芽を残すやうな方法を取らなければならぬ、之れ一は冗枝や贅條を除ひて樹容や風致を整えるのとは新芽に美大なる花を開かしむるのを目的とするもので、特に變咲培養上には必要なる事項の一つであると云

はねばならぬ。

然かしこは薔薇の種類に由つて大にその方法を異にす可きもので概して優等種の多ひ木性薔薇にあつては他の種類に比して自然に風致の備はり居るものであるから、従つて他の種類のやうに剪枝の必要の少ないものではあるが、それでも四時花季の初めに當つて前季の枝の梢頭を切り摘んだり或は衰微を來せる舊枝を生際から截り去るやうのことをしなければならぬ、もし之れをそのままにして置くと云ふと管に樹容を損ずるばかりでなく、美大艶麗なる花を開かなくなるのである。

また鉢植のものであつて數年を経過して樹幹が漸く古色を帯び來つたものでその根際に嫩芽を生じたやうな場合には惜氣もなく切り去らなければならぬ、さもないと母幹は之れがために養分を奪はれて爲めに衰弱するやうなことがあ

る、たとひその新芽が甚だ有望なものであつて將來美花を着けるの望みがあるものでも母幹を保存する意のある限りは成る可く早く取り除くの方法を採るがよい、決して兩方を満足に育てることは出來ないのである。

特に變咲を養成して之れを益々優等種に仕立て上げんとする場合などには能く注意して不用の枝葉を切り去りて有用なる枝に養分を集中する方法を取りて以て美大艶麗なる花を咲かすやうな方法を取らなければならぬ、すべて何れの植物でも草花でも美大なる花を開かし實を結ばすにはその勢力を適當な時期に最も優等の枝に集中さすやうな方法を取らねばならないのである、此故に不用なる枝葉を剪除するの必要なるは勿論のこと、時としては多くの花蕾をも摘み去らねばならない、大概一本の樹の勢力には限りのあるもので同時に數多の美大なる花を咲かすと云ふことは出來ないものである、たとひ多くの肥養分

を供給したとしてもその吸収力に限度がある以上は、そうむやみに養分を吸収同化して利用するわけに行かない。

此故に止むを得ず消極的方法に出で、他の枝葉や花蕾を除き去つて一つの目的とする枝や花蕾にのみ勢力乃はち養分を集注する方法を取るのほまた止むを得ぬことで之れが極めて必要な方法であるのだ。

その枝葉や花蕾を摘み去る方法や程度なども時と場合と目的と種類に由つて一々述べるわけに行かぬから要は培養者たるものが能くその原理のあるところを心得て臨機應變の方法を採るより仕方がない、要は只余の茲に述べ置くことは、剪枝のことは美大艶麗なる花を咲かす上に於て極めて必要で大に之れは行ふ可く研究す可き問題であると云ふことである、牡丹や芍薬その他多くの草花にしてからが、何れも美大なる花を咲かすにはかゝる方法を採るのである、況ん

や薔薇のやうな枝葉の徒らに繁茂し易いものでは、その必要が一層多いのである、薔薇栽培者は大に此點に注意する必要がある。

元來薔薇を始め其他の植物は肥料を與ふれば與ふるほどその成長が盛んなものであるから、薔薇の美大の花を咲かさんとならば一方充分に肥料を與ふると同時に他方に於て大ひに枝葉を剪定制限すると云ふ方法を取れば止むなく養分は殘餘の枝葉に集注して茲に美大艶麗なる花を開くのは自然の理である。

茲になほ蔓性薔薇を木性種のやうに仕立てる方法を述べんに先づ充分に肥料を與えて其長成に任せ置き梢頭や、細りて成長を中止したる後第二季の發芽期になつて梢頭一尺程を切り去れば小枝盛んに分れ出で、多くの花を附くるのである、かくて此種類を鉢植の風致良きものに仕立て、木性の種類に擬せんとするには其長條を抽出するに際して適宜の長さに其先端の軟らかなところを爪に

百九十八
て摘めば二三本を分岐するからして更らに其先きを再三再四摘み去ると終に枝から枝を生じて殆んど木性のやうな風致を備ふるやうになる、かゝる際に大に注意することは枝條の充分成熟したる後には俄かに短かく切り詰めてはならないことである、もし右様のことをすれば植物はそれがために忽ち衰弱して萎縮するやうなことがある。

要するに薔薇變咲培養と云ふことは諸般のことから含有してあるので種々なる方法手段が集合してその効を奏するのであるから、萬般のことに注意しないと充分の目的を達することが出来ないのである。

第十五話 薔薇名花培養法

薔薇はその種類極めて多く従つてその性狀も自から異なつておるから、自然

と培養の方法をも異にしなければならぬ、今その名花について余の實驗と薔薇について多くの經驗を有する人々の實驗とを加味してその培養法を述べることにする、世の變咲を培養せらるゝ人々は之れを參考として培養せられなば誤りが少なからう。

(一) 大 鵬

此種は木性で四季咲であるがその性比較的寒氣に弱いから冬季は充分の手當をしなければならぬ、従つて温室で培養するには最も適當な種類である、樹勢はあまり強健と云ふ程でもないがさりとて虛弱でもなく先づ中位である、之れが肥料には從來油粕を主として施したものであるが、之れに智利硝石と骨粉などを加味して施すのが良からんと思はれる、土質は燐炭さへ施せば普通の畑土で別に撰むところはないが赤土は最も適するやうである、肥料は年四回發芽

前に充分に施すのを良しとし少量の鐵分を施すとその勢が極めて宜しい。
花蕾はなる可く少くする方が益々大となつて牡丹と大差がなくなる、枝條の剪除はあまり注意するに及ばぬ。

(二) 金 碧

此種は色が朱銅色なのが大に珍とする點がある、その性やはり寒氣に強くないから相當の手当をしなければならぬ、温室で培養するを良しとする、土質は撰ぶところはないうであるが燐炭を用ひなければならぬ、肥料には硫酸「アムモニア」や骨粉や木灰を用ゆるとよい、性は強健でその枝條の繁茂が盛んであるから適宜に之れが剪定に注意しなければならぬ、さもないと花が小になる傾がある、之れは鉢植には適せない、之れが實蒔法を行ふと珍奇な變り咲を得る場合が多い、また人工媒助法を行ふにも適する種類である、余は此種

と洛陽との媒助を行ふて一つの珍種を得たことがある。

(三) 鳴 海

此種は花の表裏の色が異なる珍種で寒氣に強くその性強健である、然かもその花形大きく極めて愛す可き花で肥料は智利硝石に木灰に骨粉を配合して施すと良い、鉢植に適し數年の後には仕立やうさへ當を得れば極めて立派なものとなる、枝條は中々に繁茂するから剪定を怠つてはならない、此種は從來度々移植しないと樹勢の衰えることが他の種類よりはげしかつたが、前にも述べたやうに燐炭に依つて之れを防ぐことが出来ると思ふ、此種は温室に入れなくとも能く花を開きその生育も早い、實生に由つて變咲を得るに適する種類である。

(四) 秋 津

此種は極めて芳香に富める珍種で従つて此種と他種と人工媒助に由つて得たる變咲は何れも芳香に富んでおる、花も大きく色も艶麗で中々の良種ではあるが、その性あまり強健と云えない、此故に培養には注意しないとイケない、温室で培養するを最も良しとする、肥料は硫酸「アムモニア」骨粉、木灰等を配合して施すを良しとし土質は赤土を混じたものを用ゆるがよい、枝條の剪定にはあまり注意するに及ばない、實生にて珍種を得るに適する。

(五) 錦 鶏

此種は樹勢強健であるが人工媒助法を行ふには適せない、その花形は大きくて極めて愛す可き花で土質は燐炭を施せば撰ぶところがなく、肥料は智利硝石や骨粉や木灰を混じたものがよい、實蒔も不結果である、之れが培養に注意することはその枝條の剪定とそれから度々移植を行ふ必要のあることであるが、

移植のことは燐炭を施せば之れを行はなくてもよい、之れはもと佛國で實生から造り出したものを我邦に移して一種の變咲に仕立てたものであるそうであるが、將來はあまり有望な種とは思はれない。

(六) 豊 歳

此種は芳香高き優等種である、左程寒氣にも恐れなないが人工媒助を行ふには適せない、土質は燐炭を施せば撰ぶところはなないが多少粘土を混じたのが適するやうである、肥料はやはり智利硝石や骨粉や木灰を混じたものがよい、性は概して強健であつて従つて枝條の剪定に注意しなければならぬ、温室に入れなくとも能く四季を通じて花を開くのである。

(七) 泰 平

此種は性強健枝條長く出づる性があるから能く注意して剪枝を怠つてはなら

ない、土質は撰ぶところがなく肥料は硫酸「アムモニア」や米糠や木灰を配合して施すがよい、人工媒助法に適する實蒔にしても珍貴な變咲を生ずることがある、四季を通じて能く花を開くが花の美大を欲するには特に花蕾を摘み去つて開花さすのを少くせねばならぬ、温室に入れて培養すると特に花が艶麗となる、此種は特に鉢植に適し數年間もかゝつて仕立てると見事なものが出ることもある。

(八) 友 鶴

極めて愛翫す可き種類で萬人の嗜好に適するのである、性は強健で割合に暑熱に強い、此故に夏季には特に艶麗な花が咲くのである、人工媒助法を行ふには不^ふで土質は多少粘土質の混せるものを好む傾がある、肥料は硝石を用ひて極めて好結果を奏したことがある、然かしやはり骨粉や木灰などを配合するこ

とは忘れてはならぬ、極めて鉢植に適し二、三年間にして立派なものに仕立てることが出来る。

此種はあまり芳香は強くないが「マンガン」を施すとその芳香を増すと思はれる、余は未だ之れについて多くの經驗はないが他の草花の經驗に徴すると、やはり此種も「マンガン」に由つて芳香を増すことが出来やう、此種を温室にて培養する場合には特に水分の關係に注意しなければならぬ、然かしあまり多く施し過ぎると却つて樹の衰弱を來たすことがあるから此點に大に考へなければならぬ、要するに將來大に有望な種類である。

(九) 醉 美 人

此種は中々に可憐の花で將來大に有望の種類である、余は之れを改良せんと企て、大にその花の大きさを増した、そは主として燐炭と肥料の用ひ加減に由

つて来たしたことを思はる、肥料には智利硝石に過磷酸石灰に米糠を用ひて大ひに好結果を奏した之れが實蒔は珍奇な變咲を出す場合が多い、人工媒助法も適する、此種の特徴とするところは四季を通じてその花の見事なことで従つて改良の餘地が充分にあるのである。

然かし夏季炎熱を忌むこと他の種類より甚だしい傾があるからそれにさへ注意すればその生育は容易である、惜しむらくはその芳香が比較的少ないことである、之れには例の「マンガン」を用ゆると効があるならんと思はれる、此種も鉢植に適し室内に於て艶麗な花を開き實にその名に恥ぢぬ風情がある。

(十) 銀 世 界

此種の花は一種の高尙なる氣品を備えて鉢に培養するに好適の種類である、然かしその性はあまり強健でないから、夏季や冬季には充分の手當をする必要

がある、然かし培養の工合に由つては將來大に有望な種類であると云ふことを忘れてはならぬ。

花はあまり大ではないけれども一種の品位を備えておるところは何んとも云へない、やはり鉢植に適し室内や温室で培養するに適しておる、人工媒助法も實蒔法も行ふて珍奇なる變咲を得ることも出来る、然かし何分にもその培養が少し困難であつて往々衰弱粘死せしむるに至ることのあるのは残念である、余は此種に肉粉や骨粉や「カイニット」や米糠などの配合肥料を與えて大いにその性の改良を試みつゝある、もしも多少たりともその性が改良されて強健となり花が大きくなりそして芳香が増したならば極めて優等の種類が出来るのである、剪枝の方法も怠つてはならぬ。

(十一) 楊 貴 妃

此種はその香氣馥郁として名の示すやうに極めて艶麗な種である、之れは近來改良されて大分優等のものとはなつたが尙ほ培養の方法を怠らなかつたならば將來益々有望の種類となつて恐らく第一流の種類となるであらう、その特色は風姿の艶麗なるにあるので之れが肥料としては油粕と骨粉と木灰と米糠が適當であるらしい、要は有機肥料を主として施すのがその艶麗を増すやうに思はれる。

やはり鉢植にも適し人工媒助を行ふにも適する、性はあまり強健と云ふ程でもないけれども、さりとして決して弱いと云ふ程でもなく、その枝條は盛んに延長するから剪枝をすることは怠つてはならぬ、此點は大に名を代表せぬやうであるが、その全体の風容は何となくやさしきところがある。

此種は温室に於てますますその美を増すやうである、寒氣にはあまり強くな

いから温室外にては冬季相當の保護を與えねばならない、また夏季の炎天には日除けをすることも忘れてはならない。

(十二) 泰山白

此種は白色種中の優品で芳香も高く花も大きく極めて有望の種類である、性も可なり強健で鉢植に適し到るところに貴重せられておる、之れが肥料には硝石と米糠と骨粉とを配合したものがよろしく余の経験に由ると特に燻炭の効が著しいやうに思はれる、乃ち燻炭を用ひて培養してから見違える程に花が大きくなつたばかりでなく、大に芳香を増してその純白なる色と相待つて實に高尚な花容を示しておるその様は、千百種と數ある薔薇のその中で最も優等のものと思はれる位である、寒氣にも炎熱にも強く冬季室外でも能く花を開くのである、人工媒助法にも適し他の色澤種と交雜せしむると思ひのまゝの色彩を

出すことが出来る。

温室中で培養する場合にはその枝條の剪定とそれから濕氣の工合に注意しなければならぬ、乃ち割合に多くの水分を施す必要があるのである。

(十三) 王 照 君

此種はその性狀が多少泰山白に似ておるところはあるが、幾分か寒氣に弱き傾がある、乃ち冬季室外では開花することが少ない、肥料には智利硝石、骨粉、木灰などを適宜配合して用ゆるがよい、「マンガン」を施すと芳香が増す傾がある、土質は撰ぶところは無いが幾分か粘土質の混せるものを好む傾がある、やはり人工媒助法にも適し、また實蒔に依つて變咲を得ることが出来る、鉢植にも、しその風姿は大に他の種に優るところがある。

此種は温室に培養するとその花の美大を増し大に優等種に見えるやうになる、

然かし温室内では特に剪枝のことに注意しないと樹の衰弱を來たすことがある、水分はあまり多く施してはならない、少しく水分が多きに過ぎると根を害せらる、傾がある。

(十四) 大 平 樂

此種は優等種ではあれどその性あまり強健でない、然かし夏季の炎天には比較的能く堪えて美花を開くのである、肥料は智利硝石、骨粉、米糠、木灰等を宜配合して施すがよろしく、土質には細砂を混ずるとその成績がよい、寒氣には弱く温室に培養するを良しとする。

従來は二、三年毎に移植するを要したものであるが、燐炭を用ゆればその必要はあるまい、此種はその性として花梗が弱くて少し垂るゝ氣味があるが、やはり燐炭を施せばその性をためることが出来るに違ひない、もしもその花梗を

丈夫にすることが出来たならば將來大に有望な種と云はねばならぬ、人工媒助法にも實蒔にも適する、その花形は培養さへ適當なれば益々大輪になる傾がある、此種には水分をあまり多く施してはならぬ、害虫に罹り易い欠點がある。

(十五) 華寶殿

此種は濃黄色の極めて大輪で優等の種類である、性も強健であつて將來培養の方法さへ良ければ第一流の品種となるであろう、肥料には硝石、米糠、骨粉などを配合したものがよろしく、土質は撰ぶところはないが、砂土の混じたものが適するやうである、特に此種の欠點とするところの瓣と瓣とが相粘着するところの性は砂土と燻炭を用ゆることに由つて改良することが出来やう、また此種も度々移植を要する種であるが、やはり燻炭に依つてその性を撓めるこ

とが出来やう、實に燻炭は萬般のことについて効のあるもので特に此種などにはその効が一層切らしい。

兎に角燻炭に關する余の経験は日向は淺いけれども、その効の顯著なることだけは認めた、もしも此種の欠點とする瓣と瓣との相粘着して中から蒸せ爛れることを防ぐことが出来たならば、それこそ薔薇の種類多しとても之れに及ぶものは少なからう、性は強健で中夏や嚴冬に少しの保護を與ふればよく花を開くのである。

(十六) 連城壁

此種は性強健で枝條能く伸長す注意して剪枝を怠らぬやうにしないと美花を開かない、肥料は智利硝石、骨粉、米糠などを適宜に配合して施すとよい、土質は別に撰ぶところはないが、やはり燻炭を用ひねばならぬ、人工媒助法や實

二百十四
 時には適せない、温室で培養すると極めて艶麗な花を開く、夏季や冬季には相當の手當を施さねばならない、鉢植に適して二、三年の後には立派なものに仕上げることが出来る。

以上は各花變咲の培養法を述べて例を示したものであるが、何しろ数千百種と云ふ數ある種類であるし、且又年々珍奇な變咲の出ることであるから、到底一朝一夕に述べることの出来ないのは云ふまでもないことで、只茲にはその大要を示して培養の例にしたのであるから、讀者は之れを參考として一般に及ぼされんことを希望する。

第十六話 變咲培養と温室

近來世の進歩と共に所謂温室なるものが大分流行して來た、之れ時勢の然か

らしむるものとは云ふもの、草花趣味が廣く一般に及びつゝあるの證據ではあるまいか、誠に草花培養上喜ぶ可き現象である、されば此勢に乗じて益々盛んに温室を利用することを考えねばならぬ薔薇變咲培養に温室を利用することなどは確かに薔薇界の一進歩と云はねばならぬ。

事新らしく述ぶるまでもなく、すべての植物特に草花など、云ものは温度に由つて影響を蒙むることの極めて多きもので、花を開くのも實を結ぶのも生育するの葉の落ちるのも、みな主として温度に關係しておるのである、我邦のやうな温帯地方で四季の區別が判然しておるところでこそ草木は春花を開きて秋になつて落葉し冬になると枯死の状態になるのである、熱帯地方のやうに四季共に温度が高くて何時でも植物の生育に適する温度のあるところでは、すべての植物は四時絶えず花を開き實を結ぶのである、乃ち氣候に四季の區別が

なき如く植物の生育にも四時の區別がない。

温室は乃ち冬季温度を人工にて高めて四季を通じて植物の生育に適せしむること、なほ熱帯に於けるがやうにするのが目的であつて従つて普通の場合に植物が一年で生育するものならば、半年でその生育を遂げさすやうにするのが目的である、いや之ればかりが目的ではないが變咲培養上に利用しやうと云ふにはかゝる目的を以てしなければならぬ、乃ち二年でなければ結果を見ることが出来ないものを一年で一年でなければ明らかに性状を發揮しないものを半年で發揮するやうにするのが目的である。

元來蕃薇は多くの他の草花とは事違ひ四季を通じて花を咲くものであつて、従つてその開花温度も他の草花に比して低くてよろしく、その開花の最低温度は華氏の五十度位であると云ふのだから、他の多くの草花を培養するやうに別

段巨金を投じて完美せる温室を造らなくとも簡單なる花窓を用ひて幾分か温度を高める工夫をしてもそれでよいのである。

要するに人工媒助法を行つたり、實蒔法を行つたりするにも温室内に於てせば、甚だ完全に行はれ得るのでその結果は極めて良好であるばかりでなく、すでに温室外でかゝる方法に由つて得た變咲でも、温室内で育てればその生育が早いから早くその性状を發揮さし、従つてその結果を早く見ることの出来る利益がある、また一旦珍奇な種類を得て後にその性状を固定さすには、温室内にての培養は充分に完全に行はれ得るから、意のままに行ふことが出来るのである。

特に温室内で實蒔法を行ふときは、その發芽生育の工合が極めて良好で不完全な種子や未熟な種子で多く珍奇な變咲を出すやうなものでも、容易に發芽せ

變咲 詳説 薔薇培養秘訣 終

る。

しめ得らるゝから、變咲を得る點から云えは温室は極めて欠く可からざるものと云はねばならぬ。

今茲に温室内に於ける薔薇の取り扱ひ法について少しく述べなければならぬ、云ふまでもない温室内にては四時温度が高く、従つて薔薇の生育は極めて旺盛であるから、外部に於けるよりも多くの肥料と水分とを施さねばならぬ、そして枝条の剪定其他の手入などは怠らず行はなければならぬ、特に温室内では水分の關係に注意することが必要で、温室内は外部とは異なり雨水に由つて濕氣を得ることがないのであるから、能く此點を考へて常に水分を供給することに注意を怠つてはならぬ、幾ら肥料を施しても水分の供給が充分でないと到底その生育を全ふすることは出来ない。

其の他の取扱法に至つては、別に大なる差異がないから畧することにする。

大正
十一年八月廿九日發行
大正
十一年八月廿九日發行

著作
所有

發兌元

東京市神田區
鍋町廿一番地

著者
發行者
印刷者
印刷所

變映
詳說
薇薈培養秘訣

定價金五十錢

井上正賀

岩崎鐵次郎

東京市神田區鍋町二十一番地

木村榮吉

東京市京橋區榮女町十番地

文英社

東京市京橋區榮女町九番地

大學館

電話本局三〇六七番
銀座東京四五一七番

農學士河南休男君著

郵稅六錢

正價五十錢

家庭の花果樹詳説

本書は主として中流家庭に應用し得べき範に關於て實際的に話述し且つ營利的よりも寧ろ**娯樂用**としての栽培法を採用せる所即ち**本書の主眼**なりとす

- 花木類 ●觀葉樹木類 ●草花の種類 ●播種法 ●苗の移植法 ●肥料と手入 ●草花開花期一覽 ●色別草花表 ●栽培各論 ●球根類栽培法 ●邦産の名花 ●果樹の効能 ●果樹の種類 ●整枝と剪定 ●接木法 ●果樹各論 Ⅱ 葡萄 ●桃 ●李 ●梨 ●苹果 ●蜜柑類 ●柿 ●杏 ●梅 ●枇杷 ●櫻桃 ●無花果 ●樹莓 ●須具利 ●草莓等

附録 Ⅱ 藥用植物

農學士井上正賀君著

木版説明圖入

觀花食用 百合培養法

正價五十錢

郵稅六錢

娯樂と營利

- 百合の根 ●百合と本邦の風土 ●百合栽培と學理 ●百合の種類 ●百合の生理 ●百合と氣候土質 ●燻炭の説明 ●百合と燻炭 ●百合の肥料 ●施肥の方法と時期と分量 ●百合の繁殖 ●種球の撰び方 ●百合の連作と植付期 ●百合の植付方法 ●新種育成法 ●百合の害蟲驅除 ●百合の病害 ●收穫貯藏荷作 ●販賣と收支計算

趣味と實益

農學士井上正賀君著

庭園盆栽松培養法

正價 五錢

郵税 六錢

—(本版三十八個入)—

- 總説 ● 松の海岸 ● 松の國民性 ● 山 ● 松の生理 ● 葉の作用 ● 同化作用 ● 日光 ● 水分 ● 温度 ● 水分發散作用 ● 葉の作用 ● 葉の生育と境遇 ● 根の作用 ● 葉及莖と根
- 松の種類 ● 赤松 ● 黒松 ● 姫小松 ● 五葉松 ● 這松 ● 朝鮮松 ● 外國松
- 松の土質 ● 盆栽松と土質 ● 好適の配合土
- 松の燻炭 ● 燻炭の製法 ● 燻炭肥料 ● 松の肥料 ● 無臭肥料 ● 智利硝石 ● 硫酸ア
- 加里肥料 ● 灰 ● 硫酸鐵 ● 油粕 ● 施肥の方法 ● 盆栽に施す分 ● 松の植込
- 灰 ● 加里肥料 ● 灰 ● 硫酸鐵 ● 油粕 ● 施肥の方法 ● 庭園の松の施肥法 ● 松の植込
- 方 ● 松の座地 ● 松と風との關係 ● 松の移植方法 ● 大根を切りたること ● 移植と枝葉の剪除 ● 鉢植方法 ● 鉢の種類 ● 松の仕立
- 方 ● 松と接木法 ● 松の實蒔 ● 松の手入法 ● 根上
- 方 ● 松の仕立方 ● 松の盆栽と苔 ● 苔の種類 ● 苔を石に附ける法 ● 川石に苔を附ける法 ● 松と石 ● 松と景臺 ● 衛生と松 ● 紀念樹と松 ● 松の腐朽を防ぐ
- 方 ● 松茸の養成 ● 松茸生育の理 ● 松茸人工培養法

農學士井上正賀君著

シヤポテン蘇鐵培養法

正價 五十錢

郵税 六錢

世間唯一の手引

- シヤポテンの種類 ● 變り物養成法 ● 蘇鐵の性状
- シヤポテンの性状 ● 如何にして植付くるか ● 蘇鐵の生理
- シヤポテンの生理 ● 四季の培養方法 ● 蘇鐵の生長がよきか
- 何んな土質がよきか ● シヤポテンご温室 ● 如何にして繁殖するか
- 何んな肥料がよきか ● シヤポテン培養實驗談 ● 如何にして繁殖するか
- 繁殖の方法 ● 優等種培養實驗談 ● 蘇鐵四季培養法
- 蘇鐵培養實驗談

斯道實驗家の苦心談

農學士 野村安太郎先生著 (草花説明木版五十五圖挿入)

西洋草花栽培法

正價廿五錢
郵稅四錢

近時園藝趣味の普及に依り西洋草花の輸入口に多く内地の栽培愈々盛なり本書は古くより輸入せられたる者の外最近輸入に係るものを網羅し同好者が参考書たるを期せり

苗床 ①温床 ②唐室 ③唐室 ④唐室
⑤冷床 ⑥早咲法 ⑦人工媒助法 ⑧移植法 ⑨春の花 ⑩夏の花 ⑪秋の花 ⑫冬の花

あ①く②ら③め④ば⑤い⑥を⑦れ⑧つ⑨と⑩
う⑪ら⑫す⑬て⑭る⑮ひ⑯に⑰ゆ⑱む⑲あ⑳れ⑳も㉑ん㉒も㉓ゆ㉔む㉕夏の花㉖は㉗い㉘だ㉙
ぶ㉚ら㉛む㉜れ㉝せ㉞だ㉟ば㊱す㊲れ㊳ん㊴う㊵を㊶た㊷だ㊸ー㊹り㊺や㊻さ㊼す㊽も㊾す㊿と㊾に㊿や㊿へ㊿り㊿あ㊿ん
い㊿ひ㊿やし㊿ん㊿す㊿し㊿れる㊿ん㊿る㊿べ㊿り㊿や㊿た㊿り㊿や㊿さ㊿る㊿ひ㊿や㊿こ㊿す㊿も㊿す㊿と㊿に㊿や㊿へ㊿り㊿あ㊿ん
び㊿ら㊿ん㊿じ㊿び㊿て㊿ん㊿す㊿だ㊿り㊿や㊿す㊿す㊿ぬ㊿ー㊿さ㊿び㊿す㊿う㊿ー㊿び㊿な㊿こ㊿ん㊿ふ㊿ら㊿わ㊿ー㊿に㊿す㊿か㊿る㊿こ㊿る㊿じ㊿や㊿な㊿す㊿す㊿ち㊿ゆ
む㊿か㊿い㊿れ㊿し㊿よ㊿ん㊿ふ㊿る㊿つ㊿く㊿す㊿ち㊿き㊿た㊿り㊿す㊿ふ㊿る㊿つ㊿く㊿す㊿ざ㊿ら㊿も㊿ん㊿ち㊿ー㊿ま㊿ん㊿も㊿て㊿は㊿い㊿び㊿な㊿
ふ㊿れ㊿さん㊿か㊿ん㊿な㊿ぐ㊿ら㊿じ㊿を㊿す㊿ち㊿き㊿た㊿り㊿す㊿に㊿い㊿り㊿す㊿き㊿ん㊿ち㊿た㊿り㊿や㊿こ㊿り㊿や㊿や㊿ー㊿ほ㊿く㊿し㊿や㊿い㊿べ
こ㊿う㊿ら㊿秋の花㊿こ㊿る㊿ぞ㊿こ㊿り㊿う㊿す㊿べ㊿ち㊿ゆ㊿に㊿や㊿あ㊿す㊿た㊿ー㊿へ㊿ー㊿に㊿や㊿ー㊿ば㊿い㊿を㊿ぶ㊿つ㊿せ㊿す㊿か㊿ん
冬の花㊿な㊿い㊿し㊿つ㊿さ㊿す㊿百㊿數種の花㊿卉㊿に㊿就㊿き㊿一㊿々㊿肥料㊿灌㊿水㊿種㊿子㊿採㊿收㊿保㊿存㊿變㊿種㊿害㊿虫㊿用㊿土㊿等㊿栽㊿培㊿一㊿切㊿の㊿法㊿を㊿詳㊿説㊿す

農學士 後藤彌一先生著

和洋草花培養法

正價四十錢
郵稅六錢

草花培養の秘訣綱羅

美花を開き好果を結びしめんには草木の性を研究し之に適應する方法を以て培養せざる可からず、況んや人工媒助法を用いて、漸次之が改良をなし異花珍種を得んことを以てをや。本書は、この希望に副はんが爲めに最も簡易にして好成绩を得る目的を以て、草花小灌木の種類一二百三十餘種を春夏秋冬の四季に分類し花壇盆栽用の土壌、肥料の種類分量季節繁殖の種類として播種・根分・挿木・壓條・接木等必要無く可からざる方法を草花の一種類毎に斟酌適應する様極めて親切周到に説述せり

和洋草花説明圖壹百五十個挿入

農學士 井上正賀 著

牡丹芍藥培養法

正價五十錢

郵稅六錢

牡丹芍藥は古來より東洋の名花とし花中の王として賞美せられたるに係はらず他の草花の如く栽培に關しての書籍は一として世上に現はれざるを遺憾とし著者の實驗を基礎として詳細周密に培養の秘訣を説述せられたる珍書なり

牡丹芍藥の美(十節)

牡丹芍藥の生理(十四節)

牡丹の種類(十一節)

芍藥の種類(二節)

牡丹芍藥と土質(九節)

牡丹芍藥と燻炭(八節)

牡丹芍藥と肥料(十四節)

施肥の方法と時期(六節)

牡丹芍藥の繁殖(十四節)

牡丹芍藥の變咲培養法(八節)

花粉人工媒助法(六節)

牡丹芍藥の栽培手入法(十節)

牡丹芍藥と温室(八節)

牡丹名花培養法(十八節)

芍藥名花培養法(八節)

牡丹栽培家實驗談(八節)

- 花壇●手入●性狀●移植●落葉後の取扱●害虫●箱植●晩霜の注意●肥料●葉●莖●根●花●名稱●鉢植●砧木●接木●播植●苗床●氣候●温室●種子貯藏 (説明木版圖入)

農學士 井上正賀 著

和洋草花と肥料

附盆栽の肥料

正價金五拾錢 郵稅金六錢

方今和洋草花の培養日を逐ふて盛なりと雖も培養の根本となる可き肥料の知識を缺如するが爲めに草花の改良を見る事能はざるは遺憾の次第なりとす、著者風に肥料専門の學を修めたる上に草花の肥料に就きては多年の研究と實驗を積みたるに依り此に本書を著して三十餘種の肥料と草花の關係應用を詳説し草花栽培家の從來會て試みざる燻炭肥料に就きて殊に精細なる叙述を試みたり、されば本書を一讀してこれを應用すれば必ずや草花改良に數段の進歩を來さんこと疑なし。實に園藝家の爲めに福音たる珍書也。

●植物生育の理●花の生理●花と肥料●草花肥料の種類●燻炭肥料の事●草花と燻炭肥料●施肥の方法と期節●肥料分解の事●本邦草花肥料

●西洋草花肥料●朝顔●牡丹●薔薇●芍藥●水仙●石竹●千日紅●丈菊●美人草●草●麝香撫子●秋海棠●紫苑●秋蘭●百合●桔梗●金盞花●櫻草●紫陽花●翠菊●福壽草●罌粟●松葉牡丹●矢車草●撫子●燕子花●萬年青●女郎花●樓斗菜●萩●花菖蒲

●盆栽の生理と肥料●アネモネ●スイートピー●モンテブレシヤ●シカ●チユイ●ベロニス●チンネリア●トリニヤ●パルヘナ●テレナ●ベコニヤ●ニムタ●ヘリアントイス●シクラメン●ルトニヤ●グロキシヤ

編會究研栽盆

法養培蘭及トモ才

正價五十錢

郵稅六錢

萬年青培養の著書は絶無也

上編萬年青培養法

盆栽としての萬年青●蕃殖の方法●作土●移植●肥料

●害虫驅除●嫩芽の截取●實の採集●寒中の管理●屈曲變形法●煤助變形法等一切の必要條項を擧げて

一月より十二月に一年間の培養法に就

三種の實驗談に基いて詳

數十種を擧げ葉形の稱呼●葉文斑條の稱呼●葉面

地の稱呼●花の性質●實の種類及實生●根の變化●優等品の産地をも細述せり

下編蘭培養法

灌水●肥料●乾濕●花期の管理●分種等の細目に就

一月より十二月に四季の培養法を二種

の實驗談に基いて詳

蘭花の種類數十種を擧

蘭培養は至難を以て有名也

書珍の營經心苦

斯道大家實驗談

看舍篠常五郎氏其

農學博士鈴木梅太郎君序
宮下正男君著

藥用植物栽培及利用法

定價金五十五錢
郵稅金六錢

藥用植物の如何なるものか、之が一切の解説を與へ、且つ其性質狀

態之に藥効、其用法、用量を明にし更に農家の副業收

利を見る可き種類に就葉莖部、果實部、花蕾部、

根部、全部の五綱目に分ちて●人參●生薑●黃連●大黃●龍膽●

リッ●忍冬●藥用泊芙蘭●除虫菊●罌粟●オレイフ●ホツブ●亞麻●たうごま

●茴香●樟●カミツレ●枸杞●烏瓜●甘草●木通●麥角等●其他百七十二種の栽培法及

製法つて説明圖二十九個挿入し平易なる文字を以て詳述せる珍書なり

農學士 小山繁太郎先生序文 (説明寫真版挿入)
黃白園 主人 編

四季菊花栽培秘訣

價五十錢
郵稅四錢

菊花栽培の困難にして且丹精を要するは園藝家の熟知する所なり此種の著書の發刊せられ於てか 經驗に富む 諸先輩の苦心談を參考 實地の効用を目的 理想的栽培法を詳述せるもの 即ち本書なり。

春菊栽培法

根分の時期◎根分後の主株◎苗假植法(植付後の注意◎假植地)◎苗の選擇法◎盆栽の菊◎畑作りの菊◎定植後の肥料◎鉢植取扱法◎霜除の方法◎冬季の灌水◎蕾及開花期◎春菊の種類◎種子の保存法◎挿木及接木法◎培養法◎畑上の改良法◎塵芥土改良法◎肥料の種類◎苦心を要する點

夏菊栽培法

根分の時期◎盆栽培養法◎摘芽の方法◎培養方法◎冬季の管理法◎害虫驅除法◎支柱法◎給水及給水量◎開花期及花壽◎落花後の管理◎再咲を避く◎夏菊の種類

秋菊栽培法

第一實驗說◎栽培法◎鉢と花輪◎土壌の使用法◎鉢の表裏◎摘芽法◎土壤作成法◎肥料使用法◎備蓄法◎支柱の樹方◎完全なる接木法◎砧木の選擇◎接木後の注意

黃菊と接木第二實驗說

◎根分の時期◎苗の根分法◎苗の選擇法◎花壇植付期◎花壇の設備◎花壇の穴と剪取◎肥料の種類◎止肥及灌水◎摘芽法◎花壇に對する注意◎豫備菊の栽培◎菊栽培各種◎菊の鉢植法◎朝夕の灌水法 第二實驗說◎根分の時期◎假植の是非◎灌水の方法◎霜除の設備◎假植と施肥◎肥料の準備◎肥料及作土保有◎定植◎鉢植法◎摘芽法◎花のつけ方◎定植と枯葉◎芽の良否識別法◎菊の芽管理◎鉢作りに限る◎朝夕灌水法◎支柱の設備◎土の盛り方◎施肥法◎菊と夕日の關係◎霖雨中の管理◎開花前に良否を識る法◎鉢の選擇◎害虫驅除法 第四實驗說◎親株の選擇◎花の繁殖法◎實生の菊と花の變化◎播種用土◎種播き法◎栽付法及栽培法 第五實驗說◎大菊及中菊栽培法◎菊の栽培法◎苗の繁殖法◎施肥法◎秋菊の種類

寒菊栽培法

◎寒菊栽培法◎花壇及盆養◎懸崖風栽培◎矮生定植法◎簪作り法◎意匠栽培法◎切花用栽培法◎優れたる栽培法◎栽培及定植法◎植付後の管理法◎挿木法◎秋季の挿木◎新種作出法◎培養土の選擇

菊栽培問答

◎土質の選擇◎乾土の作り方◎油粕の使用法◎花肥とする肥料◎鉢植施肥◎油粕と害虫の關係◎人造肥料◎根分の時期◎苗床の肥料◎霜除法◎假植の可否◎土は落すべきか◎植前の摘芽◎根は切る可きか◎花壇の造方◎害虫預防法◎摘芽法◎花肥の施肥◎害虫驅除法◎害虫の研究◎花壇の設計◎花壇の雨障子◎雨障子の造り方◎花の觀賞法

氣候と植物

◎氣候◎太陽◎地球◎大氣◎植物と光線◎溫度と海洋◎風と溫度◎植物と溫度◎植物生育と氣濕◎氣壓◎植物と風◎濕氣と植物◎日本の植物帶◎南部半熱帶◎北部半熱一帯◎白檜帶

露香園主 富田曉霞君著 (本版説明圖入)

朝顔栽培法

價廿五錢 郵稅四錢

花の色 ● 瑠璃 ● 白色 ● 紅色 ● 紫色 ● 鼠色 ● 柿色 ● 緋色 ● 黄色 ● 綠色 ● 鳩羽色 ● 茶色 ● 黒色 ● 樺色 ● 緋色 ● 藍色 ● 重覆輪 ● 二重覆輪 ● 絞 ● 裏絞 ● 吹掛絞 ● 星絞 ● 猿絞 ● 二色絞 ● 緋絞 ● 鹿角絞 ● 染別 ● 刷毛目絞 ● 須田絞 ● 花の地色 ● 葉色の種類 ● 斑 ● 藍甲斑 ● 合黄色 ● 古錦 ● 鼠葉 ● 柿色 ● 三色 ● 絞 ● 葉の形 ● 普通葉 ● 立田葉 ● 葉玉 ● 捲 ● 葉の特性 ● 七福 ● 六曜 ● 柳葉 ● 葉の癖 ● 縮細葉 ● 蛇葉 ● 渦川 ● 花葉の種類 ● 牡丹性 ● 大覆輪性 ● 變 ● 南天 ● 葉の癖 ● 界渦 ● 打込 ● 抱 ● 掬水 ● 花葉の種類 ● 葉異花 ● 七福葉 ● 亂菊 ● 覆輪 ● 各種の葉 ● 花の平莖 ● 角莖 ● 苔と花 ● 雌蕊 ● 雄蕊 ● 培養土 ● 播種 ● 床 ● 地 ● 發芽前後の注意 ● 鉢に播種する法 ● 移植 ● 培養要項 ● 澆水 ● 雨季節注意 ● 援竹 ● 芽の摘 ● 嫩葉と花 ● 七福 ● 獅子 ● 南天 ● 雨龍 ● 立田 ● 雀 ● 莖 ● 際 ● 木立朝貝 ● 花を摘む事 ● 葉の形 ● 通常葉 ● 林風 ● 玉葉 ● 簀葉 ● 梅葉 ● 莖 ● 花葉 ● 黒紫 ● 茶色 ● 帯びた黒紫色 ● 赤紫色 ● 紅色 ● 茶色 ● 斑點 ● 斑點ある物 ● 接木 ● 寄接 ● 摺芽 ● 接 ● 木の ● 結果 ● 温室培養 ● 種子採收 ● 人工媒助法 ●

農學士上正賀君著

和洋花草變咲培養法

郵稅六錢

正價五十錢

木版説明圖入

園藝家必携の珍書

菊 ● 朝顔 ● 薔薇 ● 牡丹 ● 芍藥 ● 百合 ● 櫻草 ● 花菖蒲 ● グーリア ● バイオレット等を始め和洋草花の有名なる物に就きて變咲培養の秘訣を傳授するに叮嚀親切を極む

生物の變化 ● 植物の變化 ● 變咲の意義 ● 花粉の交雜 ● 花粉交雜に由る變化 ● 人工媒助法 ● 種子と變性 ● 變性種子貯藏法 ● 變性種子の播種法 ● 變性種子の移植法 ● 變咲培養と接枝術 ● 變咲繁殖と挿木法 ● 變咲培養の要點 ● 主要草花變咲培養法 ● 一般草花變咲培養法の綱目を擧げ更に數百項に分ちて細叙す

趣味と實益の一舉兩得

子爵 伊東已代治君題字
香樹園主人 江原春夢共編

(寫真版五十二葉挿入)

名家盆栽奇石逸品集

價五十錢
郵稅六錢

本書は編者が諸名家を歴訪し其愛藏の逸品を撮影したるものを蒐集せり加ふるに各自多年の経験になれる培養及配置の方法に就いての苦心談をも掲載したれば彼の徒に各自上の研究になれる坊間の書とは全くその撰を異にせり。掲載寫真版左の如し。

●柏(喜谷市郎右衛門氏藏) ●杜松(小栗富次郎氏藏) ●檜柏(加藤樹峽氏藏) ●あかひで(某子爵藏) ●杉(小宮三保松氏藏) ●巖石松(大隈伯爵藏) ●小品盆栽(大隈令夫人藏) ●富士櫻(板倉子爵藏) ●(山本善清氏藏) ●富士按(益田孝氏藏) ●桑(栗林半江氏藏) ●櫻(萩原彌吉氏藏) ●石榴(常盤津林氏藏) ●巖石(服部八右衛門氏藏) ●ごうだんと伊吹虎の尾(晴下義照氏藏) ●白檀(鈴木雷友氏藏) ●紅葉鳥(大隈伯爵藏) ●野梅(長井利右衛門氏藏) ●小葉楓(松澤蒼龍氏藏) ●眞柏(香樹園藏) ●杜松(大隈伯爵藏) ●根洗石付の杉(西村覺三氏藏) ●黒松(平岩龍虎氏藏) ●眞松(松澤園藏) ●松翠軒氏藏) ●眞柏(木村源兵衛氏藏) ●姫石榴(喜谷竹陰氏藏) ●野梅(高橋新吉氏藏) ●赤松(松澤樹(栗林松壽氏藏) ●針樅(鈴木政右衛門氏藏) ●檜棹果(奥貫雲泉氏藏) ●石榴(服部八右衛門氏藏) ●赤松(永富雄吉氏藏) ●玉眞蘭(奇石(吉田丹左衛門氏藏) ●刷(奇石(下村壽抱氏藏) ●奇石(西村覺三氏藏) ●眞柏(大畑多村氏藏) ●柏(高木利八氏藏) ●杜松(伊藤博邦公藏) ●奇石(柴田伊吉氏藏) ●そろ(渡邊千秋伯藏) ●石榴(奇石(岡田市太郎氏藏) ●ふな(苦香園藏) ●姫石榴(神田樂天氏藏) ●盆栽陳列(加藤樹峽氏藏) ●盆栽陳列第一席(百草園) ●盆栽陳列第二席(百草園) ●盆栽陳列第一席(清大園) ●盆栽陳列第二席(清大園) ●盆栽陳列第一席(千樹園) ●盆栽陳列第二席(千樹園)

農學士 野村安太郎先生著(盆栽陳列寫真) 本版説明圖入

盆栽植物採集及培養法

價廿五錢
郵稅四錢

坊間に流布する盆栽培養の書籍敢て少なしと謂ふ可からざるも、其の根本たる植物は何れより採集するやを説きしもの殆んどこれなし、著者頗る遺憾とし數年間の苦心に依り實生物を成育し、樗木を肥培するの方法即ち盆栽として觀賞し得らるゝに至るまでの方法手段悉く網羅し詳説せられたる無比の珍書なり 目次の大要左の如し。

盆栽植物 ●盆栽植物の要素 ●發育の素直なる事 ●根張の強盛 ●盆栽植物の種類 ●柯枝の數多ある事 ●古色を帶る事 ●盆栽用の樹木 ●實生物

採集法 ●實生物の撰擇 ●實生物發生地 ●實生物培養法 ●實生物の植付 ●植付の法 ●實生物花壇培養法 ●實蔭培養法 ●實生物培養法 ●實生物の土 ●實生物培養法

實生物採集の場所 ●松 ●杉 ●榎 ●樺 ●榆 ●楓 ●沙羅双樹 ●榛 ●落葉松 ●山桑 ●栗 ●柳 ●黃櫨 ●槻 ●かなしで ●曾根 ●榊 ●山日紅 ●いばた ●檜 ●紫金牛 ●梅 ●梨 ●櫻 ●桃 ●李 ●花黃楊 ●藤 ●早月 ●木瓜 ●石楠花 ●柘榴 ●百日紅 ●葦 ●路 ●常夏 ●秋海棠 ●萬年青 ●佛甲草 ●蘭 ●石菖

農學士 後藤彌一先生著

家庭園藝 盆栽手入り法

正價廿五錢
郵税四錢

梅◎椿◎水仙◎福壽草◎蘇鐵◎桃◎薔薇◎蘭◎海棠◎松◎柳◎藤◎竹
 ◎檜◎櫻◎楓◎牡丹◎芍藥◎萬年青◎梧◎石菖◎萬兩◎菊◎南天◎石
 榴◎木犀◎李◎柑橘◎佛手柑◎百日紅◎萩◎雞頭◎櫻欄◎芭蕉◎杉
 ◎柿◎錦木◎杜松◎榎◎櫻草◎落葉松◎木瓜◎梅嫌◎山茶花等著名
木花 數百種に就いて 一月より十二月に到る 毎月の栽培法に分類し各盆栽毎に 灌水の注意 害虫の驅除 移植
春蒔根別 播種付植 鉢植◎日除◎箱室◎温室の準備 霜除◎施肥◎接木◎摺木の數十
ちて詳細編密に説明したれば 盆栽愛玩者が 座右の 珍本たり 附録 手入一覽表

382
368

7.12.20



332
368

終

